Bull. Mukogawa Women's Univ. Nat. Sci., **52**, 1–3 (2004)
武庫川女子大紀要(自然科学)

流行性耳下腺炎と化膿性耳下腺炎の2例に関する一考察

田中　繁宏，相澤　　徹，四元　美帆，小柳　好生，野老　　稔
(武庫川女子大学健康・スポーツ科学科)

A study of two cases of an epidemic parotitis and a bacterial parotitis

Shigehiro Tanaka, Toru Aizawa, Miho Yotsumoto,
Yoshio Koyanagi, and Minoru Tokoro

School of Letters Department of Health and Sports Sciences, Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663-8558, Japan

It is reported that viral infections have been increasing recent years. An epidemic parotitis is an acute systemic mumps viral infection that occurs most commonly in children, and clinically characterized by non-suppurative parotitis. Parotitis, meningitis, orchitis, and pancreatitis are clinical manifestations of mumps. The differential diagnosis of parotitis includes infections caused by other virus or bacteria. We experience two cases of parotitis. First is an 18-year-old female with bacterial parotitis, and second is a case of 33-year-old male orchitis with epidemic parotitis. Although sterility caused by orchitis is an uncommon complication, it is important for adults to make new viral preventive strategy against such as Mumps.

緒　言

近年，風疹，ムンプスウイルス，ノロウイルスなどのウイルス感染症の増加が懸念されている．流行性耳下腺炎は，パラミクソウイルス属のムンプスウイルスによるもので小児によくみられる全身性の疾患である．耳下腺が腫脹し[1]，髄膜炎，膵炎，副睾丸炎，睾丸炎などを呈する．鑑別診断は反復性耳下腺炎，頚部リンパ節炎，化膿性耳下腺炎である．我々は以前から，稀な症例や注意すべき症例をを報告してきた[2,3]．今回，青春期発症の化膿性耳下腺炎と成人発症の流行性耳下腺炎を経験したので報告する．

症例1．化膿性耳下腺炎の1例

18歳　女性

(主訴)左前耳下腺部痛

(既往歴)特になし．3歳時におたふくかぜ．

(家族歴)特記事項なし

(現病歴)サッカー部に所属し，クラブ活動を続けている．平成16年9月20日頃から，左耳下腺腫脹，および同部の痛みが続くため21日スポーツクリニック受診．

(現症)意識清明，貧血・黄疸なし．体温37.2℃．呼吸音異常なし，心雑音聴取せず．左耳下腺部腫

Fig. 1. A photograph of face shows left-sided parotid enlargement

脹，圧痛を認める(図．1)．同側頚部リンパ節腫脹：1/2 大豆大，弾性軟．

(血液検査)白血球数 6790/μl(好中球 60.0，リンパ球 25.0，単球 8.4，好酸球 3.8，好塩基球 0.4 %)．ムンプス IgG(9/21：34.5：陽性 9/28：27.5 陽性)．ムンプス IgM(9/21：0.17：陰性 9/28：0/15 陰性)．CRP：陰性．アミラーゼ 342IU/L(9/21)，179IU/L(9/28)．

(経過)21 日からクラリシッド(200mg)分 2/日を内服し，ロキソニンは 1 錠のみ内服した．耳下腺部の腫脹は徐々に軽快し，7 日目にはほぼ消失した．

症例 2．流行性耳下腺炎の 1 例

33 歳　男性

(主訴)両側耳下腺部腫脹

(既往歴)柔道による外傷以外特になし．3 歳時におたふくかぜ．

(家族歴)特記事項なし

(現病歴)平成 16 年 9 月初旬頃から，左耳下腺腫脹，および同部の痛みがあり，右耳下腺も腫脹してきたため近医受診．流行性耳下腺炎と診断され保存療法のため解熱鎮痛剤を処方された．

(現症)意識清明，貧血・黄疸なし．体温 37.8℃．呼吸音異常なし，心雑音聴取せず．両側耳下腺部腫脹，軽度圧痛を認める．頚部リンパ節腫脹なし．

(経過)解熱鎮痛剤で解熱し 9 月 10 日には両側耳下腺部腫脹がほとんどみられなくなった．しかし，片側睾丸が腫脹し，さらに痛みもでてきたため近医再診．血液中アミラーゼを測定されたが正常で，膵炎は起こしていないようだが，睾丸炎を起こしていると診断され，解熱鎮痛剤および消化薬を処方された．その後，7 日間の自宅療養で睾丸炎は軽快し，会社に復帰した．

(考察)2 症例共に，3 歳時にムンプス(おたふく風邪)に罹患していると既往にある．臨床経過および検査結果から，症例 1 は確かに罹っている(ムンプス IgG 抗体が上昇している)が，症例 2 は他の疾患でムンプスには罹っていなかったようだ．良く似た症状を示す疾患があるので注意を要する．

一般に 15 歳までに 90%以上がムンプスに対する抗体を取得する[1]．1996 年米国では乳幼児を含め 751 例が報告されている．2000 年以前では最も少なかったとされる[1]．この年の米国ではでは症例 2 は比較的稀な疾患ということになる．しかし，最近はそれほど稀でないことに問題がある．イギリスでは 1996 年に 94 例だったのが 2003 年は若い世代を中心に 1500 例強となった[4]．英国では MMR ワクチン(風疹，はしか，ムンプス)接種を受けていない若い世代(英国では 1990 年以前生まれは measles(はしか)ワクチンのみだった)に対して MMR 接種を薦めている[4]．日本でも臨床的に風疹，ムンプスなどのウイルス性疾患が増加している．日本では MMR ワクチンが髄膜炎を起こしたとして中止され(日本で接種された MMR ワクチンは欧米で使用されているワクチンと少し違う)，はしかは 2 歳，風疹は 3 歳，おたふく風邪は任意となっている．欧米でおたふく風邪が少ないのは MMR ワクチン接種のためである．しかし，英国でも腸炎などの副作用のため 1998 年から接種率は減少している．皆が安心して接種できる MMR ワクチンの正しく認識された見解が望まれる．

一般に流行性耳下腺炎は乳幼児の疾患で，耳の下(耳下腺)が腫れて痛みがでる．たいてい左右とも腫れるが，片側のこともある．腫れは約 1 週間でおさまり，熱は 3～4 日で解熱する．頭痛，嘔吐，全身倦怠感などを伴うことも多く，顎の下(顎下腺)が腫れることもある．幼児～小学校低学年が流行しやすい．不顕性感染といって症状がはっきりしないで感染することが約 30～40%にみられる．潜伏期は 2～3 週間．原因はムンプスウイルスの唾液を介した飛沫感染．合併症は無菌性髄膜炎(約 10%)，睾丸炎・卵巣炎(下腹部痛を伴う)，膵炎．思春期以降の感染では重症となる場合が多く，子どもでは稀な精巣炎を起こすことも多い．唾液腺の腫れがひいてから 8 日以内に腫脹することが多い．男性は不妊になるのは約 10%程度とされる．約 10%程度という数字の根拠は明確でない．治療は解熱鎮痛剤などによる対症療法．卵巣炎の頻度は男性の睾丸炎にくらべて少なく約 7%とされるが，上述の約 10%と同様この数字の根拠も明確でない．

症例 2 も精巣炎を起こしており，可能性は少ないが男性不妊になるかも知れない．重大な問題であるのは，世間での関心が低く，実際，不妊の割合がどの程度なのかも良く分かっていない[4]．この理由として調査が難しいからだと推察される．

1 歳以上の子は任意でムンプスのワクチンを接種することができる．90～95%に効果があり，ワクチン接種に伴う耳下腺の腫脹は 1～2%，無菌性髄膜炎の頻度は数千～1 万人に 1 例．おたふくかぜのワ

クチンは生ワクチンで，1回の注射で効果がある．しかし，接種を受けてもおたふくかぜにかかる確率は5～10%ほどあり，はしかや風疹のワクチン接種と比べて少し高い．

鑑別診断として，耳下腺が腫れる病気は，反復性耳下腺炎，化膿性耳下腺炎がある．

反復性耳下腺炎は，片方だけ腫れ，熱は出なく，痛みは軽く，2～3日で治る．さらに他人にうつらず，何度もくり返す．原因は感染症やアレルギーの関与などが考えられているが，はっきりしない．治療は特になく，対症療法による．

症例1でみられた化膿性耳下腺炎は，口の中の細菌が，唾液腺導管から耳下腺に入り込んでおこる急性の化膿性疾患で黄色ブドウ球菌，溶連菌などが原因菌となる．初期にはおたふくかぜとの区別がつかないことがある．普通は片側の耳下腺が腫れ，痛み，圧痛，発熱，頭痛などを伴う．ステンセン管開口部から膿がでてくることがある．治療は抗生物質で，重症時は入院治療が必要なこともある．

要　約

近年ウイルス感染症の増加に関する報告が多い．流行性耳下腺炎はムンプスウイルスによるもので小児によくみられる全身性の疾患で，耳下腺が腫脹する．髄膜炎，膵炎，睾丸炎などを呈する．鑑別診断は反復性耳下腺炎，頚部リンパ節炎，化膿性耳下腺炎である．我々は青春期発症の化膿性耳下腺炎と成人発症の睾丸炎を合併した流行性耳下腺炎を報告した．男性不妊になる可能性もあるので，予防法の確立が望まれる．

文　献

1) Goldman Bennett. Cecil Tektbook of medicine 21st edition. Saunders. 1808-1809(2000)
2) Tanaka, S., Aizawa, T., Yotsumoto, M. et al., *Bull. Mukogawa Women's Univ. Nat. Sci.*, **50**, 7-11(2002)
3) Tanaka, S., Aizawa, T., Yotsumoto, M. et al., *Bull. Mukogawa Women's Univ. Nat. Sci.*, **51**, 7-12(2003)
4) Dobson, R., *BMJ.*, **329**, 132(2004)